

## 『リリカル・バラッツ』の形成(4)

著者	吉田 冬蔵
雑誌名	日本歯科大学紀要．一般教育系
巻	12
ページ	25-56
発行年	1983-03-25
URL	<a href="http://doi.org/10.14983/00000234">http://doi.org/10.14983/00000234</a>



# 『リリカル・バラッド』の形成 (4)

新潟歯学部 吉 田 冬 蔵

Tozo YOSHIDA: The Making of *Lyrical Ballads* (4)

(1982年11月 8 日受理)

## 『リリカル・バラッツ』の形成 (4)

## VII

## 抒情詩 4 篇

Wordsworth の新作中にバラッド体ではない短い抒情詩の一群がある。

『家から少し離れた所で書かれた詩』 (*Lines written at a Small Distance from my House*) [初版の配列順位 7]

『早春に書かれた詩』 (*Lines written in Early Spring*) [11]

『忠告と返事』 (*Expostulation and Reply*) [18]

『局面転換』 (*The Tables Turned*) [19]

是等 4 篇は作者の思想と信念を直截に表明し、自然に対する態度と感じ方を端的に表現しており、佳作として知られている作品である。皆連関したあるいは類似した内容をもっていて、1815年版詩集の分類では『情緒と内省の詩』 (*Poems proceeding from Sentiment and Reflection*) の部類に包括されている。

『家から少し離れた所で書かれ、子供に託して名宛人に届けられた詩』 (*Lines written at a Small Distance from my House, and sent by my little Boy to the Person to whom they are addressed*) は使いの子供に持たせて妹 Dorothy に送る形をとった10聯40行の小篇である。初版の長い標題は1845年版以後は『私の妹へ』 (*To my Sister*) と簡潔に改題された。IF 註によると『Alfoxden House 前で作。この際の私の小さな使者は Basil Montagu の息子だった<sup>1)</sup>。』この息子というのは Wordsworth のケンブリッジ時代の友人 Montagu の亡妻の遺児で、兄妹が Racedown 以来引きとって養育していた子供である。『父親達のための話』 (*Anecdote for Fathers*) の主人公 Edward として登場していた。今度もやはりそれと同名で呼ばれている。

本篇は1798年3月上旬に書かれたのだろうが、『早春に書かれた詩』も同じ頃か、或いはむしろ4月初旬以後かと思われる。同類の『忠告と返事』およびその姉妹篇『局面転換』の2篇はこれ等より凡そ2か月位後で、多分5月末頃か6月の始め頃に、作られた。

此の詩は『三月の最初のおだやかな日』(“It is the first mild day of March”)という行で始まっているが、事実この年の3月上旬は Dorothy の日記の記事を照合してみると<sup>2)</sup>, mild, sunny, warm 等の形容詞がびったり適合するような陽気の日の記述が続いていて、此のような詩が生まれて来た状況を想像させて呉れる。

陽春の季は『大気のうちにも天恵がある』ので<sup>3)</sup>, 現実の暦の上では3月でも詩人の気持ではこれが新しい年の始め、新生涯の初日とも感じられるのである。『理論の五十年間よりも今の一瞬が多くのことを与えてくれる<sup>4)</sup>。』それで詩人は『本など持たないで、この一日することもなく過ごそう<sup>5)</sup>』と妹に勧めるのである。先ず既成の因習的理論を離脱して、『忠告と返事』の所謂『賢い受身』の態度で自然から感じとろうとする。自己を虚しくして、山野草木にもみなぎっている歓びに感應し、調和した広大な自然界の秩序に包蔵される智慧に触れようと努める。

再来する春の季節の喜びはもとより古来詩歌の好題目であるが、Wordsworth はこの伝統的テーマを取り扱うにあたって彼の特質をよく表明している。自分の自然観を周到な表現力で親しみ易い言葉づかいのうちに具現化している。唯この際読者が余り深刻めいた哲理にのめり込んで過度な詮索をするとしたら、それは却て詩人の所謂『解剖して台無しにする』だけのことになって、此の詩の主意をも歪める結果になるかもしれない。

『早春に書かれた詩』(*Lines written in Early Spring*)については IF 註は解説して言う:『私が小川のほとりに坐っておった間に 実際に作られた。此の小川はオールフォード村が在る谷合いから流れ下りオールフォックスデンの土地を通りぬけて行く。それは私の選り抜きの憩いの場所だった<sup>6)</sup>。』以上の説明の後に此の場所の流水、滝、草木などの作り出している風景が悉細に述べられているが、この24行の小篇は斯うした詩人の気に入りの休み処で書かれたものである。

春の到来で自然界が一新し鳥獣草木凡そ生物一切が喜びに溢れているのを詩人は感じるが、この自然にあまねくゆきわたる喜びを感得するにつけても、ひるがえって現世の人間の所業に想到すると詩人は眉を顰めざるを得なくなる。

『人間が人間をどうしてきているかを考えると

私の心はたいへん傷まされた<sup>7)</sup>。』

人間社会で人が人にやって来たことを反省してみると詩人は慨嘆しないでいられないのである——Robert Burns が『人に対する人の非人道が無数の者を歎かせる<sup>8)</sup>』と嘆じたように。この充たされない人道主義的願望が、類似の主題を扱っている4篇の抒情詩の中で、此の1篇にだけ明るい喜びと混じて稍暗い影を投じることになる。この種の暗影は他

の作品、『最後の羊』(*The Last of the Flock*), 『サイモン・リー』(*Simon Lee*) 等に於ても感じられるものである。

『忠告と返事』(*Expostulation and Reply*) の IF 註を開くと『多くの場合に知ったのだが、この詩はフレンド会派の人々の間に好評だ。1798年オールフォックスデンの家の前で作られた<sup>9)</sup>。』と記されている。好評の理由は示されていないが、この詩の内容を思うと成程とうなずけるようだ。

本篇が書かれた因縁については初版の『はしがき』(*Advertisement*) の末尾に次のような説明が附けられている。『「忠告と返事」と題された詩およびそれに続く作は近代の道德哲学の書物にいささか不合理な程に熱中していた友人との談話が元で出来た<sup>10)</sup>。』この友人というのは通説では William Hazlitt だろうと考えられている。哲学書に没入していた友人が Hazlitt で此の詩は彼に言及しているということは必ずしも確証はないのだが、Hazlitt は1798年5月下旬から6月中旬頃迄の期間に Coleridge と Wordsworth を訪問しており、この間に Wordsworth と『形而上的議論』をしたことは『詩人達との最初の面識』(*My First Acquaintance with Poets*) の中に明記されているので<sup>11)</sup>、普通には Hazlitt だと推定されているわけだ。Hazlitt との議論が起因となっていたとするなら、この詩と『それに続く作』すなわち『局面転換』の2篇が書かれた時期は、IF には『春』と語られているが、実際にはおそらく5月23日頃以後から6月12日頃迄の間ということになろう<sup>12)</sup>。

本篇は全8聯32行のうち第4聯(ll. 13-16)を除いて、友人 Matthew の忠告(sts. 1-3, ll. 1-12)とそれに対する William の返事(sts. 5-8, ll. 17-32)とから成る問答詩である。

Wordsworth の言うように哲学に没頭していた友人との談話から本詩が生れて来たとしても、他方詩中で勧告をする“my good friend Matthew”(l. 15)については詩人の小学校時代の先生が聯想されてくる。本文中の Esthwaite 湖は Hawkshead 校の南方の湖水で学童達の遊び場であり、また問答の相手 Matthew という名は1799年の作『マッシュー』(*Matthew*) 及び同期の作で是と関聯した数篇のマッシュー詩群と結びついてくるから<sup>13)</sup>、この聯想は当然である。

『マッシュー』とその序註で作者自らが語っている所によると、Hawkshead のグラマー・スクールに当時も保存されていた扁額に同校が1585年創設以来の教師の名前が就任退職の年月も附けて200年の歳月を経も早色褪せた金文字で記されており『数字と氏名の綴に名聲の僅かな名残<sup>14)</sup>』をとどめているが、その中に Matthew の名前があった。すなわち

『マッシュー』の場合の主人公は詩人の村賢時代の旧師 William Taylor を原型としている。

Taylor はケンブリッジに学び1781年から Hawkshead 校の校長を勤め86年に32才で他界した。『墓石には本人の希望で Gray の墓畔哀歌の数行が刻まれた<sup>15)</sup>。』性来詩を好み書を愛した。その蔵書は少年 Wordsworth の詩心を育成する培養土となった。この事は『序曲』第 X 巻に回想されている<sup>16)</sup>。生徒の Wordsworth としてはまたと得難い良師だったろう。

さて Wordsworth は更に『マッシュー』の IF 註で『本篇及び Matthew に関係のある他の諸篇については事実の文字通りの悉細を尽くすとしても得る所はなからう。『逍遙篇』(The Excursion) 中の 'Wanderer' のように、この教師は彼の仲間及び他の職業の人達の数人から作り上げられたのだ<sup>17)</sup>。』と説明し、現実的事実がこの場合不要なことを附言している。マッシュー詩群中の村賢教師は銀髪の老人で快活な人物として現わされている<sup>18)</sup>。つまり『マッシュー』の主人公は数人の人物から合成して創出された複合体である。同じようなわけで『忠告と返事』の Matthew も詩作の目的に適合するように按配された合成画像である。

なお Matthew の構成について Moorman は一意見を提出している。Wordsworth が少年時代に親しく接していた Hawkshead の老行商人を挙げて、これが後のマッシュー詩群の Matthew、『あばらや』(The Ruined Cottage) の 'Pedlar'、『逍遙篇』の 'Wanderer' の性格を構成する主要素となったと Moorman は見ている<sup>19)</sup>。

さて、『忠告と返事』の中では、Matthew が、書物はそれが無ければ盲目同様な我々人間に遺された光明なのだから、書物を開いて先賢達の精霊に接す可きことを (ll. 5-8) 勧告するのに対して、William は次の様な趣意で答える：宇宙自然の諸力はおのずから人間の心に作動するから我々は自分の精神を賢明な受容の心構えで養ない得る (ll. 21-24)、我々に断えず語っている万物のこの広大な全体の裡に何ものか自ずから現われるものがあるので、私は今その大自然と接しているのだ (ll. 25-28)。

Matthew の理論が理知的能動性に依るものとすれば、William の反論は直感的受動性に基づくと言ってよからう。しかし後者の受身的態度は前提として前者に劣らぬ敏活な積極性に裏打ちされている筈である。後者の主張の中の『賢明な受容』("wise passiveness" l. 24) という有名な句が、Moorman も指摘しているのだが<sup>20)</sup>、『逍遙篇』の詩稿の中にも用いられていることは興味のあることだ。Selincourt 編の全集を開くと Pedlar の相貌についての未定稿断片が採録されているが、その一部に殆ど同様の言葉づかいが見出される<sup>21)</sup>。この原稿の日時は1798年始めの2か月くらいの間だから、『忠告と返事』より数か

月早いだけで、凡そ同じ時期である。つまり作者はこの特徴的な表現で示されている特異な思想を当時いつも心中に培っていたと思われる。

賢い受身の態度で直接に自然の印象を受納すれば自然は誠実で最良の教師であるという Wordsworth の意見と相応じている考え方が Coleridge の『夜鶯』(*The Nightingale*, ll. 23-49) に表明されている。既成観念で固められた耳目で事物に反応しないで、自然の野山で手足を延ばして四辺を見聞すれば、『常に愛と喜びとで満ちている自然の甘美な声<sup>22)</sup>』が素直に聞こえる筈である——『夜鶯』は此のようなことを反省させてくれると Wordsworth は John Wilson (Christopher North) への手紙で言っている<sup>23)</sup>。

『局面転換；同じ主題について、夕暮の情景』(*The Tables Turned; an Evening Scene, on the Same Subject*) は IF 註によると『「忠告と返事」と同時に作られた<sup>24)</sup>。』作者はこれ等2篇を後年書きあらためることを殆どしなかった。これは言わんと欲していたことを何の滞りもなく卒直明快に吐露し得たから今更筆を加える必要はなかったからだろう。前作と同様な8聯32行であるが、この全体が Matthew に対する詩人の勧告の形になっている。一篇中に Matthew の名は記されていないが、“my friend” (l. 1) という呼びかけが Matthew を指すことは前作と本篇との関係を考えれば自明である。

この詩の趣意——書物の不毛な頁 (l. 30) をめくるのは退屈な果てもない論争 (l. 9) をつづける様なものだ；べにひわやつぐみの歌声を聞くとずっと多くの智慧や教えが得られる；自然を師とするがよい (ll. 1-16)——このような趣旨は4篇の抒情詩群中『早春に書かれた詩』を除いた他の3篇に特に共通して詠じられている。形の上では3篇だが思想としては同一の詩である。

斯様な思想から当然派生する自然教育論を Wordsworth 兄妹はその養育を引き受けていた男児 Basil の教育に実践していたようだ。未だ Dorothy が Racedown にいた1797年3月の手紙に次のように書かれている。『パジルについての私達の方式を知り度いとお望みですが、その方法は至極簡単なやり方です。大変簡単ですから、この方式時代ではあなたはそのやり方に附いてはいらっしゃれないでしょう。子供が自分の感覚の確証を通して習う以外、私達は現在のところ彼には何も教えていません。…彼は文字を知っていますが書物学習の過程でもっと先へ進めようとは私達はしていません<sup>25)</sup>。』つまり兄妹は人の五官を通じて自然から得る感覚的経験に娯や教育の重要な基礎を置き、この際書物から得られる知識に第一義的価値を置いていないのだ。

『春の森から感じとられる一つの感動は…凡ての賢人以上に教えてくれる<sup>26)</sup>。』これも先に Dorothy に対して勧めた言葉と同趣旨である<sup>27)</sup>。森の雰囲気は詩人に感得させる衝動

と諸先賢の遺訓とをくらべた場合、先年詩人が傾倒したゴドウィン思想も当然彼の脳裡に想起されたことだろう<sup>29)</sup>。

『我々のおせっかいな知識が事物の美麗なすがたを歪める。——我々は解剖をして殺しているのだ<sup>29)</sup>。』詩人の言う此の余分に出しゃ張ってくる理知云々という考えが敷衍されると『序曲』の終りの諸巻の論旨へと展開する<sup>30)</sup>。『序曲』では、人間の理性の分析的解剖的な作用はそれ自体は元より重要な働きだが、それだけが作用して直観的理性の働きが加わらなければ、正確な判断を失ない事物の核心を捕えそこねる虞れがあることが指摘されている。また『得るところのない差し出がましい 不要な区別立て<sup>31)</sup>』に特に若い者が没入し易いことが反省されている。詩人が『解剖をして殺す』といましめる所以であろう。

詩の末行に『じっと視て受け容れる心<sup>32)</sup>』と言っているのは『賢明な受身』と同じ考え方を別の言葉で言いかえているわけで、『忠告と返事』『家から少し離れた所で書かれた詩』に盛られている信念と同じである。

是等の詩については特に、若し読者が簡明直載にしてしかも誇張逆説的な措辞に包まれた真意と文字の裡に呼吸している詩想とを充分味読しようとしなければ、詩章の多くは科学的理論から全く逸脱した単なる痴愚の戯言に化してしまうだろう。

## VIII

### *Tintern Abbey*

『旅の折ワイ河畔再訪の際、ティンタン僧院の上流数マイルの所で書かれた詩、1798年7月13日』(*Lines written a few miles above Tintern Abbey, on Revisiting the Banks of the Wye during a Tour, July 13, 1798*) は、初版では6行に互って分かち書きされているほどの長い標題が示している通り、ワイ河再遊の所産である。普通には *Tintern Abbey* の標題で知られているが、僧院そのものは唯題名に出て来るだけで、本文中には12世紀の建立後400年を経て廃絶された此のシトー修道会僧院の遺址については全く言及されていない。標題中の『7月13日』の日付はこの詩の完成された日時を示していると思われる。

この時の旅については本人の筆録が甥 Christopher 編の『回想録』(*Memoirs*) 中に収められており、これが旅の概略を述べている。『私達は6月26日月曜日の朝オールフォックスデンは離れた。次の月曜日迄 Coleridge の家で暮らし、ついで徒歩でブリストルへ出立した。私達は Cottle 家に1週間滞在した後ワイ河岸の方面へ進んだ。セヴァン河の渡しを越し更にその先10マイルを歩いてワイ河畔の大へん美しい廃墟ティンタン僧院に



到った。翌朝河筋に沿いモンマスを経てグッドリッチ城まで歩き、其の地で宿泊。そして翌日はティンタンへ戻り、其処からチェブストゥへ、更にチェブストゥから船でまたティンタンへ引き返し其処で泊った。それから小型便船でブリストルへ帰った。

ワイの河流は幅広く底深く堂々として厳めしい川である。流れは決して遅れることなくたゆたうこともない；何時も河流のささやきが聞こえている<sup>33)</sup>。』

もともと Wordsworth にとってワイ流域は曾遊の地であり再訪を想っていた景觀だった。彼は1793年夏ワイト島やソールズベリ平原を経て更に北ウェールズの山野をひとりて歩きまわり、この旅の途次始めてワイの溪谷を訪れていた。後年の『ピーター・ベル』(*Peter Bell*)の原型と想われる鋳掛屋と道連れになったのはこの旅でビルの近くに於てであったし、また『わたし達は七人』(*We are Seven*)の小娘に出会ったのもこの旅の途中グッドリッチ城を訪れた時のことだった<sup>34)</sup>。ワイ河の旅は再三 Wordsworth に詩材を与えてくれたが、彼は現世の焦躁に精神の傷む時自分の心は森林を縫って流れるワイの水流へ向こうことが実にしばしばであったと『ティンタン僧院』の中で歌っている<sup>35)</sup>。

今度は1793年往訪の5年後だった。この詩の冒頭に先ず『五年の歳月が過ぎ去った；夏が五辺、五度の長ながしい冬と共に！<sup>36)</sup>』と詠じ始められている。今回の遊歴には Dorothy が同道した。期間は7月中旬の4日間で、兩人がワイの流れをめざして出発したのは多分7月10日だった。元来健脚の兄妹だったにしても、50マイル余の行程は、もちろん全部が徒歩ではなかったにせよ、あまり楽でもなかったろうと思われる。Wordsworth がワイ河畔の風物に強く引かれていたことは、自ら記している通り、短い期間中にティンタンをくり返して訪ねていることから知られる。

ワイ河の旅から此の詩が生れてきた経過に関しては IF 註に彼自身の説明がある：『本篇ほど私にとって思い出して愉快的境地で作られた詩は私の作中一つも無かった。私はこれを、ワイ河を渡った後ティンタンを離れると直ぐに始めた、そして妹と一緒に四、五日の旅を終って、夕方ブリストルに入って来た丁度その時に仕上げた。詩の一行も変えられなかったし、どの部分もブリストルに着くまでは書き記されなかった。本篇はその後殆ど直ぐに小さい書物で公刊された…<sup>37)</sup>。』

また本篇の制作について詩人がアーガイル公に語ったこととして、『「ティンタン僧院」を1798年に書いたが、作るのに4日かかり、最後のおよそ20行くらいはクリフトンからブリストルまで丘を歩いて下る時に作られたと Wordsworth は私達に話した。』ということが伝えられている<sup>38)</sup>。彼が IF 註で、ティンタンを離れると直ぐに始めブリストルに戻ると完成したと言っているのを思い合わせると、最初の10日ティンタン宿泊の夜あたりから作り始められたとでも推定しなければ、この4日間という日数はくいちがってくるよ

うだ。

IF 註の中で作者は一行も改められなかったしどの部分もプリストルに着くまでは書き下ろされなかったと語っているのだが、是を言葉通りにだけ受けとれば、作品の推敲をくり返すことの多かった Wordsworth としてはむしろ稀な場合と言わざるを得ない<sup>39)</sup>。IF 註は彼の後年の追想だから必ずしも悉く事実に合致してもしないだろう。彼の言っていることは唯この詩が詩情のむらがり湧き立つにつれて詩想が一气呵成に詩句を成しなんの渋滞もなくたちまち全体がまとまって160行の雄篇が形成されてしまったという事の次第を述べたかったのだろう。彼が此の一篇ほど思い出しても愉快な事情のもとで作られたものはなかったと述懐する所以である。

作者の所説を総合整理して考えると次のように推定される。此の詩は多分、兄妹が10日先ずティンタンに到り宿泊、翌11日朝ワイ河筋をさか上ってモンマスの方へ歩き出した頃に脳裡に構想或いは記録され始めた。その翌12日チェブストゥ行きを経てわざわざ又ティンタンに逆戻りし、更に翌13日船便によってプリストル迄帰ったが、その船上で詩の大部分が作られ同日タプリストルに帰着すると即刻まとめて仕上げられた。そして当日のうちに Cottle の手に渡されたに相違ない。当時『リリカル・バラッズ』初版は既に印刷に着手されており事は迅速を要したのである。そして此の最新の作が詩集の最終の数頁を飾ることとなったのだ。

本篇中に、作者の言う通り、Young から暗示を得た部分がある。『だから私はなお未だ…眼や耳の見聞するおよそ広大な世界、耳目が半ば創造するものも又認知するものもいづれもの愛好者である』(ll. 103-108) という個所に Wordsworth は自註を加えて、『此の行 (l. 107) は Young の美事な詩行にたいへん似よっている、その正確な言いまわしは想い出せないのだが。』と断っている<sup>40)</sup>。是は Edward Young の『夜想』(*Night Thoughts*) の詩句を指している：『感覚はそれらが観る驚嘆す可き世界を半ば創造する<sup>41)</sup>。』我々の諸感覚が対象事物から受けとる反応は主観的個人的だから、場合によっては見聞する者自体の感覚が半ば創出しているようなこともある——斯様な主旨と思われる。なお『半ば創造する』(half-create) という表現は Wordsworth の当時の詩稿の断片にも見られる<sup>42)</sup>。

『ティンタン僧院』が初版の諸作品中で特徴的な存在であることは贅言を要しない。作者は1800年版に附記して彼の抱負を述べている：『ワイ河再訪の詩への註記——私はこの詩を敢てオード (Ode) と呼ぼうとはしなかった；しかし詩の調子の推移すなわち転調の裡に又韻律の昂揚した音楽の中に、斯の種の詩作すなわち Ode の基本的必須条件が見出だされるだろうという希望を以てこの詩は書かれたのだ<sup>43)</sup>。』本篇はオードとは称されて

いないものの、全く『斯の種の詩作』の範疇に属するものである。『サイモン・リー』や『馬鹿息子』のような lyrical ballads の種類とは縁の遠いことは勿論である。詩集の標題から見れば “a Few Other Poems” の中に入れられるわけで、『実験』諸作の埒外に在る。ワイ河の風物を詠じている始めの方の部分では一見十八世紀風な伝統を引く風景詩のような印象を与えさえもする。だが作者がこの無韻詩の中で自己の体験と心境を熱情の沈潜された平静な表現で詠じ出すと、それは従前の韻文の世界には聞かれなかったような新鮮な調子を奏でてくる。初版全巻の立場からみれば『リリカル・バラッド』の典型的な作品ではなくなるが、本篇は全一冊の作品中でその最高峯をなしている。『実験』の枢軸の役目はになっていないが、作者の詩情の中核を胚胎し彼の思想の基盤を形成しているからである。

此の詩には後の他の秀作において開花すべき蕾が逸早く開こうとしているのが見られる。『序曲』(The Prelude) は『ティンタン僧院』の約半年後、1798年秋から翌年2月 Goslar 滞在の頃に、書き始められたと推定され、その記述内容は凡そ1798年頃迄の詩人の経歴に涉っているわけだが、『ティンタン僧院』はその『序曲』の要約とも考えられよう。『序曲』が『詩人の心の成長』(Growth of a Poet's Mind) の経緯を記録した精神的自叙伝であるならば、『ティンタン僧院』は詩人の自然観を昇華した反省録である。

## IX

### 初版出版までの経緯

1797年11月中旬の Wordsworth 兄妹と Coleridge との歩き旅で『リリカル・バラッド』の構想が浮かんだが、それ以後11月下旬から12月始めにかけては、此の新しい企画は大して進展しなかった。Wordsworth は『国境の人々』(The Borderers) 上演の仕事に忙殺されていたようだ。彼は仕上げた脚本を Covent Garden 劇場へ送付し<sup>40</sup>、更に劇場の立役者 Thomas Knight の助言によって舞台に適するように筆を入れたりしなければならなかった<sup>45</sup>。そんな用件で12月中1週間以上滞京した。しかし結局同劇場の座頭 Thomar Harris は上演を承諾してはくれなかった<sup>46</sup>。また Coleridge も『オソリオ』(Osorio) を Sheridan に託して Drury Lane 劇場で上場を目論んでいたのだが、これも実演に不適として却けられた<sup>47</sup>。そんなわけで Dorothy が11月中旬に報じていた『William の数篇の作品と Coleridge のバラッドとを一緒に出版する計画<sup>48</sup>』の方は簡単には進まなかったのだ。両詩人の作品を一巻にまとめる合著形式の詩集『リリカル・バラッド』の共同出版の企図は一貫して順調に進捗したのではなく、時と場合とによって変転をくり返

して行くことになるのである。

年が明けて翌1798年1月6日 Coleridge がブリストルのユニテリアン派牧師 John Prior Estlin へ宛てた手紙には、『老水夫の歌』を *The Monthly Magazine* へ持ち込もうとしていることが語られている<sup>49)</sup>。Richard Phillips の運営していたこの雑誌へ売り込む案は前年11月の当初計画の段階に於てだけで、やがて Wordsworth と共著詩集出版の形へ移って来ていた筈である。この手紙は、Coleridge が Estlin 牧師等の前年以来的尽力で聖職者の地位に就くことが出来そうになっていた折に、図らずも Wedgwood 兄弟から経済的恵与の申し込みに遇って二者択一の岐路に迷い、結局『たいへん 苦しい躊躇の拳句<sup>50)</sup>』Wedgwood 兄弟からの最初の恵与を謝絶してしまった、其の直後に書かれたものである。この時 Coleridge は、彼の言葉づかいによれば<sup>51)</sup>、全く一文無しであり、Estlin に10ポンドの借金を頼んでいるような有様で、その様な経済難打開の為の一つの足掛りとして、此の当初計画をまた持ち出してきて見せているのかも知れない。

この手紙の中の“my Ballad”が『老水夫の歌』であるという確証のないことは前に(第10号 pp. 62-63)触れたことだが、今此処に述べた論は勿論『老水夫の歌』と断じて差し支え無かろうという前提に立って論じたことである。

この手紙の翌月2月18日 Coleridge が Cottle に宛てた書翰の中にも“my ballad”という句が出てくるが<sup>52)</sup>、是についても同じく前に記したことがある。この出版者宛の書翰が書かれた時は Wedgwood 年金を結局受納することに決まった後ののだが、彼は『なお未だ Wedgwood 兄弟から何も受け取っておらず又私の金は全く使い果たされています<sup>53)</sup>』といった手元不如意の現状を訴え、併せて作品の出版計画などについて述べている。この書翰中のバラッドが『老水夫の歌』であるとしてもないとしても、両詩人の共著出版に関しては此処でも亦なにも言及されていない。

Wordsworth は1月下旬から3月初めにかけては未だ短詩よりはむしろ長篇無韻詩の仕事を続けていた。『隠者』(The Recluse)の構想を進めたり<sup>54)</sup>、後年の『序曲』の一部と成った断章を書いたりしていた<sup>55)</sup>。また『あばらや』の補筆をして3月上旬には900行にまで増大させた<sup>56)</sup>。是は前年6月 Coleridge が始めて Racedown を訪ねた時に朗読されて彼を大変喜ばせた作品だった<sup>57)</sup>。

Wordsworth は長篇の哲学的詩を執筆していたことについて3月6日付と11日付でそれぞれ友人 James Tobin および James Losh に宛てて同じような文言で報じている<sup>58)</sup>。それによると、彼はここ数週間は相当精を出して作詩に励み1300行を書いた；この詩は自分の全知識の大部分を傾注するものであらゆる事物が自分の計画の範囲内に入って来る；其の目的は自然、人間、社会の様相を活写することであり其の標題は『隠者、または自

然、人間、社会に関する見解』と題されよう。斯かる長詩についての主意は後年『逍遙篇』1814年版の『序言』(Preface)に要約されたことと同じである。このような抱負を以て彼は長篇哲学詩に取り組み始めていたのだが、元来 Coleridge が Wordsworth に斯かる作品を書くようにと勧奨していたのだ。Coleridge は3月7日付 Cottle 宛の書翰の中でこの作品に讃辞を呈している。『巨人 Wordsworth——彼は凡そ1200行の無韻詩を書きました。私は断言するに躊躇しませんが、それは我が国語で書かれた何等かそれに類似のどんな作品よりも秀れたものです<sup>60)</sup>。』

『リリカル・バラッド』に収められた短い抒情詩やバラッド体詩の多くは3月始め以後に書き始められた。この頃以後になって、Wordsworth の所謂『実験』的新作品が制作され出した。その創作理論は初版の『はしがき』(Advertisement)で論及され更に1800年版『序言』(Preface)に於て展開されてゆくことになる。この頃彼の創作活動が活発だったことは Dorothy の3月5日付 Mary Hutchinson 宛の手紙でもわかる。彼女は兄が前週徴恙の態だったがやがてそれも回復し今は彼の能力は毎日のびてゆくようで今迄よりずっと易々と作詩をし詩想の流れ出ることが速くて文字に連ね得ない位だと報じている<sup>60)</sup>。

3月8日は『オールフォックスデン日記』にたいへん暖かい日と記されているのだが、此の頃に『三月の最初のおだやかな日』で始まる短詩が書かれた。この前後から5月中旬までの間に『ブレイク婆とハリ・ギル』『サイモン・リー』『狂った母親』『馬鹿息子』『最後の羊』『見捨てられたインデアン女の嘆き』『わたし達は七人』『父親達のための話』『いばら』などが書かれた。これらの諸作は『リリカル・バラッド』に特色ある一相貌を与えているものである。

諸、当時 Wordsworth 兄妹には日常生活の根拠地を失うような切実な事態が生じて来ていた。彼等にとって居心地の良かったオールフォックスデンを離れなければならないような破目になっていた。奇妙な国際間諜容疑に端を発した問題である。

其の頃英仏両国が陥っていた敵対関係の下では、オールフォックスデン近傍に住む人達の眼から見れば、余所者の Wordsworth 一家が兄妹という触れ込みで小児を伴れ定職も持たず、Coleridge という『非道い過激共和主義者の悪党<sup>61)</sup>』と一緒に夜昼の別なく山野をうろつき歩くような風変りな行動をして暮らしていることは時局非常の折から怪訝としか思いようがなかったのだろう。ところで前年1797年7月中旬に John Thelwall が Coleridge を訪ねて来たことがあった。両者は1年位前から文通を通しての知友だったのだ。たまたま彼等はオールフォックスデンに集まったが、この時の会合について Thelwall は自分の妻宛に『ほんとうに私達は大層哲学的な集まりだ…Coleridge と妻

Sara, Wordsworth と妹および私とから成る熱心な一団だ<sup>62)</sup>』と報じている。Thelwall は Coleridge にとっては『たいへん暖い心の正直な人<sup>63)</sup>』だったけれども、一般の世人にとっては1794年反逆罪で裁かれ天下に名を轟かせた「危険思想家」だったのだ。土地の人々は此の Thelwall の来訪を思い合わせて、挙動不審な渡り者達に対する疑惑を益々強めてきた。両詩人は本人が気付かないうちにフランスのイギリス侵入を手引きする諜報者に仕立て上げられていたのだ。政府機関が兩人の身边を内偵していた<sup>64)</sup>。

ところで、Wordsworth に Alfoxden House を貸していた家主で15世紀以来の旧家を誇る St. Albyn 家の未亡人は Wordsworth を甚だ好ましからぬ借家人ときめつけ、前年1797年夏至から一か年間の契約だったのだが、その貸借期限の延長を承諾しなくなった。Coleridge や Wordsworth が此の地方へ来住するのに尽力してくれたストウイの名望家 Thomas Poole の奔走も徒労だった。住むこと一年で Wordsworth 一家は此処を退去する破目に陥ったのである。当時の兄妹の手紙をみると困惑の様子がうかがえる。

Wordsworth は3月初旬友人 Tobin に宛てて書いている：『私達は夏至にオールフォックスデンを離れます。…私達の行く先がどうなるかは言いようがありません。もし私達に金が出来れば徒歩旅行をするでしょう；多分ウェールズを通して北方へ。私達が何処へ行くかは現在のところでは全く言えません。Coleridge との交際と Poole の友情とを除けば、ストウイ近辺に執着しているべき特別の理由はなにも有りません<sup>65)</sup>。』兄妹は当然まず引越先の決定に困却した。Dorothy も Mary Hutchinson に宛ててなげいている：『私達はオールフォックスデンを離れることにきまっています。…この近所で家を手に入れる機会は殆どないので、私達はもう一辺レースダウンへ戻ることになり相です。Coleridge とのおつきあいの外には、此処にとどまるべき他の大へん強い誘因は何も有りません。が、それは大層重大な事です所以私達には大へん心にかかります。…<sup>66)</sup>』Dorothy は前年オールフォックスデンに引越して来た時に、『私達が此処に引きつけられた主な誘因は Coleridge との交際でした<sup>67)</sup>』と Hutchinson へ報じたのだったが、今度此処を去るについて彼女が上記のように嘆じているのは当然のことだ。

Coleridge にとっても、Wordsworth が此処に転居してきてからは Alfoxden House は自宅みたいな気持だったろう。お互の距離は凡そ3乃至4マイル位しか離れていなかったのだから、彼は『転地のために』自分の所と Wordsworth の新居とを行ったり来たりして過していたようだ<sup>68)</sup>。両詩人の友情によることは勿論だが、Coleridge が先年大層な抱負で以て始めたネザ・ストウイの生活ではあったが、其処のうす暗くしめっぽくて鼠が出没する借家<sup>69)</sup>よりも『海に近く大へん美しく浪漫的な環境<sup>70)</sup>』の『広大な邸宅<sup>71)</sup>』である Alfoxden House の方が居心地がよかった所為もあっただろう。4月上旬 Coleridge

は Cottle に手紙を送り、自分達が力を尽くして詩人 Wordsworth を此処の自然の中に留まらせなければ此の地の山林河海悉くが挙って非難の声を挙げるだろうし、Poole と自分も Wordsworth を此処から失うことの思いに耐えられない旨を伝えている<sup>73)</sup>。だが Poole や Coleridge の尽力もうまくはいかなかった。

Wordsworth が夏至の時期から先は住む所がなくなるという窮境は、しかし、全然別な方面から異なる展開をみせてきていた。Coleridge が Cottle に上記の手紙を4月上旬に出した時には既に事態は、少なくとも両詩人の心の中では、急旋回をし始めていたのだ。兩人は下記の Wordsworth の手紙にあるような『愉快的企画』に想到していたのである。Dorothy が『大へん暖い日』と記した3月8日の翌9日に、Coleridge 夫妻が訪ねて来て18日迄10日間程滞在したが、その時全く新しい思いきった企画が持ち出された。すなわちドイツ遊学の提議である。3月11日付 Wordsworth の James Losh 宛の書翰が始めてこの計画についての消息を伝えている：『私達はよんどころなく夏至に此処を去らねばなりません。…私達は懸念しながら愉快的企画をしております。…Coleridge, 同夫人、私の妹および私はドイツへ行こうという決意をしました。其処ではドイツ語を勉強することと自然科学の知識を何とか物になるくらい身につけるために向こう2年間過ごそうという目的です。私達の案は、気持のよい、出来たら山の多い地方で、可能なら大学近くの村に腰を落着けたいということです。この場所は、旅費の関係上、出来るだけハンブルグに近いことが望ましいことになりましょう<sup>74)</sup>。』この Coleridge の提案はひどく唐突のようだが、しかし Christ's Hospital の生徒時代から Lamb の所謂『論理家、形而上学者、詩人<sup>75)</sup>』であった Coleridge としては決して咄嗟の思いつきなどではなかった。むしろ従前から彼地に渡ってドイツ神学や形而上学を研究し特にカント哲学を攻究し度いということは彼の宿願だったわけだ。彼は此の企画の実現を『自分の知的効用にとって又勿論自分の道義的幸福にとって<sup>75)</sup>』非常に重要だと見なしていたのである。Wordsworth は James Losh にも渡独の仲間入りを勧めていたが彼は加わらなかった。結果としては、Coleridge の妻 Sarah も妻子同伴は費用がかさむ為同行せず、彼の崇拜者 John Chester が参加した<sup>76)</sup>。

Coleridge が3月に Wordsworth 訪問中オールフォックスデンで出版者 Cottle に宛てて、日付は不明だが、多分13日頃書いたと推定されている書翰がある。その中で Coleridge は Wordsworth に頼まれたのだがと前置きして、次の様な作品集を刊行するとした場合の出版者の意向を尋ねている：第1、兩人の悲劇2篇『国境の人々』と『オソリオ』

をまとめて1冊、——両篇の主要人物の解説を含めた短い序文を付けて、合わせて約5000行；第2、Wordsworthの詩2篇『ソールズベリ平原』、『ある女の話』(*The Tale of a Woman*)および他の若干の詩篇を加え註を付けて、合わせて1冊；第1の原稿はCottleの返答後1週間以内に、第2の原稿は3週間以内に、それぞれ発行者へ渡すこと；稿料は共に4か月後悉皆支払いの事<sup>79)</sup>。

此処で言われている『他の若干の詩篇』("a few others")は前年11月13日付 Dorothyの手紙の中に書かれた『ウィリアムの若干の作品』("some pieces of William's")に該当するものと推察される<sup>79)</sup>。『ある女の話』は『あばらや』を意味している。後になって『逍遙篇』第1巻の基と成るものだが、まとまった1篇と見て公にしてもよいと考えたのだろう。Wordsworthは『国境の人々』に短い序文を付けると言っているが、彼が劇中人物の性格分析に腐心した此の小論は結局1926年 De Selincourtの紹介迄草稿のままで残ってしまった<sup>79)</sup>。

Coleridgeのこの手紙はつまり幾許稿料を出版者Cottleが出して呉れるかをWordsworthに代って打診しているわけだが、前年秋計画された両詩人共著の詩集1冊という企図は、此処で見る限りは、だいぶ違ったものに成ってきている。両名の作品集2冊の出版計画は、ドイツ遊学という新事態が生じて来て、其の費用捻出から想いついた窮余の一策だったのだろう。Coleridgeは4月上旬Cottleに宛てて『その遂行のために或る程度の金額が必要な計画に私達の考えは傾けられています<sup>80)</sup>。』と言っている。渡独計画も先ず先決問題は費用だった筈だ。Coleridgeの場合はたまたまWedgwood兄弟の後楯があった。その年金が1月17日に受諾され、3月初旬に最初の賦払分が支払われた。斯様な便宜を持たないWordsworth兄妹にとっては差し当り売文の手段に頼る以外はなかったわけだ。彼は、よく知られているように、自作の推敲をくり返して行ない、完璧を追求して容易に公表へは到らない傾向があった。『罪と悲しみ』『あばらや』『国境の人々』『序曲』など皆その執筆から発表迄の間に少なからぬ時間的経過がある。納得のゆく迄公刊を肯んじない性癖だから、Cottleに尋ねている出版企画もおそらくColeridgeの勸奨と経済上の急迫に従って止むを得ず斯かる措置に出たまでで、自ら好んでのことではなからう。ずっと後年、1842年、『国境の人々』『罪と悲しみ』が公にされた年だが、彼はAubrey de Vereに、刊行ということはひどくいやな事で若し金があったならば果して出版したかどうか疑問ですと言っている<sup>81)</sup>。またColeridgeの13日付手紙の僅か以前3月6日付のWordsworthの手紙には、誇張した言い方かも知れぬが、出版は死と同じくらいこわいことだと書かれている<sup>82)</sup>。

ColeridgeがWordsworthを代弁した質問に対してCottleがどんな返書を書いたか



はわからないが、相談は充分には実らなかったようだ。Cottle の回想録から推すと次の様だったらしい：Cottle は兩人の劇2篇に各々30ギニを提供しようと考えた、ところが兩人は劇の上演の可能性になお執着があったのかそれを出版することに躊躇している様だった；Cottle は自分が手がける出版物として Wordsworth の詩集（前記第2の1冊物）に望を囑した；Cottle が3月末か4月初始め頃兩人に会った時、Wordsworth は多くの抒情詩や新作を朗読してくれたが、Cottle はその出来栄に感じて出版を勧めた、しかし Wordsworth は発表する考えには反対したので Cottle は作者が再考して呉れることに望みを託して別れた<sup>83)</sup>。Cottle のこのような記録からだけでは当時の事情ははっきりし難いのだが次の Coleridge の手紙で少し補われてくる。

4月上旬 Cottle へ宛てて Coleridge が書いているところから見ると、兩人はドイツ遊学すなわち『或る程度の金額が必要な計画』の費用を工面するために、彼等の脚本の出版をも考えてはいたわけだが、しかし『Coleridge が6,7か月もの間思考と能力とを傾注し、また Wordsworth が更にそれ以上の時間と思考と才能とを使い尽くした<sup>84)</sup>』2篇の悲劇については Cottle の評価額では恐らく不満だったのだろう。だがさしあたり各々30ギニの代価が得られるなら気の進まないことだが手放そうかと思ってもいた。Wordsworth は詩集の版權を30ギニ以下では譲る気はなかったろう。ところで幸いにも旅費は別途調達を目論見得ることになったので劇の出版は止めることになった。Coleridge が別の方策で調達すると言うのは、今春から支給が始まった Wedgwood 年金を頭に置いてのことだろう。それはともあれ、この Coleridge の手紙の中でも、兩人共著の形の詩集については依然として余りくっきりとは浮かんできていない。

4月12日 Wordsworth は Cottle に宛てて『喜んで下さると思いますが、私は大層迅速に詩囊を拡充してきています。是非おいでになり私の朗読をお聞き下さい……<sup>85)</sup>』と報じている。作品の増大を告げているのだが、快速で書かれていた是等の新作は前に述べた凡そ10篇の彼の所謂『実験的』試作品に該当する。なお『ピーター・ベル』も Dorothy の日記によるとこの頃（多分4月20日）に書き始められた<sup>86)</sup>。Wordsworth と同じように Coleridge も亦この頃 Cottle の来訪を勧めていた<sup>87)</sup>。

4月30日に Dorothy が兄 Richard Wordsworth へ送った手紙にはドイツ行きの予定が報じられており、ハンブルグまで凡そ20乃至25ギニかかること、費用稼ぎの仕事の中で翻譯がいちばん得になると兄 William は考えていること等が記されているが、Dorothy はまた兄の詩集のことについても知らせている：『William はいくらかの詩を出版しようとしています。一卷に対しては20ギニ受け取る筈であり、また殆ど発行準備のされている他の一卷については其の2倍以上を彼は期待しています<sup>88)</sup>。』此処で彼女が言っている2

冊の詩集は、おそらく前者は Cottle と相談していたが実現に到らなかった一巻（前記第2の1冊物）であり、後者はやがて『実験的』新作を加え『リリカル・バラッド』と成っていった一巻を指していると思われる。

Wordsworth は5月9日 Cottle 宛の書翰で、4月に2冊物で Cottle から出た Charles Lloyd の『エドモンド・オリヴァ』(*Edmund Oliver*) は未だ読んでいないこと、『ソールズベリ平原』を仕上げて出版しようと決めていることを語って、続けて斯う言っている：『私は近頃別の計画で忙しくして来ました。それは貴君にお会いするまでは述べ度くないのですが<sup>89)</sup>。』彼が別の計画と書いているのは矢張り詩集のことで『リリカル・バラッド』に言及したものと考え度い。

作品の出版に関しては、5月末か6月始め頃と推定される Coleridge の Cottle 宛手紙を見ると、『Wordsworth は「ピーター・ベル」あるいは「ソールズベリ平原」を単独に出版することには異論はありませんが、自分の作品を2巻にして出すことは絶体的に好まらず不賛成です<sup>90)</sup>。』と書かれている。この文言から推察すると、詩集出版について Cottle は多分、Wordsworth の劇と『あばらや』以外の稍長い作品を1巻とし比較的短かい詩群を他の1巻にまとめ計2巻とすること、Coleridge の作品は劇『オソリオ』を含めて1巻とすることを提案していたらしい。是に対し Wordsworth は自分の短詩だけを1冊にまとめることには不賛成で、両詩人の考え方は両人の短詩は合わせて1巻とすべきことだった。その理由は、Coleridge によると、各人の作を別々にまとめたなら作品全体として変化を欠くことになる、1篇のオードが1作品であるように詩集は或る程度1個の作品なのであり、両人の異なる詩篇はオードの中の聯の如くで、それで相互的に良いものになるのだと言うことである<sup>91)</sup>。是と同じ趣旨に帰することを Wordsworth が1800年版『序文』中で述べている：『多様性ということのために、また私自らの弱点を意識しているので、私は友人の援助を願うことになり、彼は「老水夫の歌」「乳母の話」「夜鶯」「圀園」の諸篇および「恋」と題された詩を提供してくれた。だが私の友人の詩が私自身のものと大層同じ傾向を持っていることを、又、詩の主題についての意見は殆ど全く一致しているのだから私達の詩風の色合いに差違はあっても不調和は無いことを、もし私が信じていなかったならば、この援助を願うことはなかっただろう<sup>92)</sup>。』

結局 Cottle の考えと両詩人の意見とは部分的には一致していなかったわけだ。

上記の Coleridge の Cottle 宛手紙の中には後に『老水夫の歌』に関して一言書かれている。『だが理屈は皆止めにします；老水夫については、以前のようにやっていく可きだということを变らぬ意見として述べるだけです<sup>93)</sup>。』勿論この詩は前年秋着想されて以来次第に大きくなって最初予想された雑誌詩の規模をはるかに超え658行にも及ぶ雄篇と成

り、Dorothy の3月23日の日記に記してあったように既に早く仕上げられていたのである<sup>94)</sup>。

この手紙に、また、Coleridge は著作を経済的後援者の Wedgwood 兄弟に献呈したらどうかと Cottle が勧めるのに同意できかねると述べている。その理由を彼は斯う説明している：『Wedgwood 兄弟への献呈は慎しみを忘れたことであり且つ無意味でしょう。もし今後4、5年経って、煩いの無い閑寂な境地でなければ書きおせないような何か重要な作品を仕上げられたら、その作品を Wedgwood 兄弟に献呈し度いと思います。世間に作品が出るのはその煩いの無い閑寂な境地を私に与えてくれた方達のおかげでしょうから<sup>95)</sup>。』

更にまた此の Coleridge の手紙には新しい詩集を無記名で出し度いと書かれている。彼は Cottle の勧めに反して両作者の名を伏せて公刊することを主張した。『匿名出版については、確かに、貴殿はまちがっておいです。——Wordsworth は全く無名です——私の名は大多数の人々にとって鼻持ちなりません。——「人間論」(*The Essay on Man*), 「植物園」(*The Botanic Garden*), 「記憶の悦び」(*The Pleasures of Memory*) その他多くの大へん著名な作品が無記名で出版されました<sup>96)</sup>。』Coleridge は匿名出版の実例に詩壇の3作を挙げているが、当時自分達に出版年代の比較的近い事例を選んで示したわけだろう。

この手紙の最後のところで Coleridge は詩集印刷の体裁に関して希望を述べている。彼は、Cottle 書肆から2年前初刊今年増版の Robert Southey の『ジョアン・オヴ・アーク』(*Joan of Arc*) 第2版を引き合いに出して、次のような注文をならべている。『…1頁に18行、行は密接して印刷、「ジョアン」の場合よりももっと密接して——(是非とも、もっと密接して！ W. Wordsworth) 同一インキ；そして大きな欄外余白。それで美事です——<sup>97)</sup>』括弧内の書き込みは Wordsworth の筆蹟で、彼も Coleridge に賛同してわざわざ記入署名したものとみえる。

此の Coleridge の Cottle 宛、5月末か6月始め頃と推定される、手紙をみて気の付くことは、『リリカル・バラッツ』の全体的性格や出版の具体的企画について 著作者出版者両方の考えが漸くなんとかまとまってきて、それがやっと実を結ぶ時季に迄到達して来ているということである。

Coleridge と Wordsworth と両方から招請されていた<sup>98)</sup> Cottle が両詩人を訪問したのは5月下旬頃だったらしい。彼はおそらく5月22日あるいは23日から30日迄の間頃に1週間余にわたって ネザ・ストゥイと オールフォックスデンとを訪れた。たまたま Words-

worth がその月18日にブリストルに行っており、用件は Coleridge と彼の弟子 Charles Lloyd との間に生じた確執を解きほぐそうとすることだったが、Wordsworth はその帰途に多分 Cottle と同道して戻って来、ネザ・ストゥイに立ち寄ったのだった。Coleridge を加えて Wordsworth 達がオールフォックスデンに帰るとたまたま食糧品が無くて、唯パンの塊に菜園からの沢山のレタスを添えただけのおかしな正餐が供された。Cottle の所謂 *the bread and lettuce dinner* として知られている<sup>99)</sup>。

Cottle の滞在中に両詩人は彼を伴って彼等が気に入りのそして作品とも因縁の有る旅路——例の Lynton, Lynmouth, The Valley of Rocks 方面へ遠足を試みたりした<sup>100)</sup>。

Lynton 地方への歩き旅の際に『リリカル・バラッド』の計画が漸く具体的に決まってきた。大体はこれ迄におおよそ考えられていたような形で固まったようだ。詩集には30ギニが支払われること、標題は“*Lyrical Ballads*”とすること、『ソールズベリ平原』は含まず唯その抜粋を入れること、『ピーター・ベル』は加えず各種の短詩を、多くは新しく書かれた作品を、載せること等が決められた。また Cottle は2巻物をすすめたのだが、共著の1冊物にして匿名出版とすることに落ち着いた。事は直ぐに『老水夫の歌』から始められることになった。多分5月30日に Cottle はブリストルへ帰ったが、その時『老水夫の歌』や Wordsworth の詩稿を携えて行った<sup>101)</sup>。

5月31日に Dorothy が兄 Richard へ宛てて次のように書いているところを見ると<sup>102)</sup>、両詩人と Cottle との協議は両方とも先ずあまり不満のないところにおさまったのだろう。『ウィリアムは今ブリストルの出版社に何篇かの詩を置いていて、その印刷を監察したいと望んでいます。…ウィリアムは詩をたいへん有利に売ったのです——印刷が終ったところで金を受けとる筈になっています。』Dorothy が斯う書いていた5月末は、彼女がこの手紙にも述べているように、オールフォックスデン退去予定まで僅かもう3週間位に迫っていた。たまたま知友の James Losh がブリストルから凡そ5マイルの Shirehampton に住んでいたし、兄妹はブリストル辺で暫時下宿生活をして詩の『印刷の監察』などもし度いと考えたのだろう。前出の Coleridge の手紙でもうかがえたように、彼も詩集の印刷に関心が深かったことはあたりまえのことだ。Wordsworth はこの後何回もブリストルへは行ったようだが、思っていた程印刷の監察が出来たかどうかはわからない。

Cottle が両詩人を訪ねたと同時期に、或いは少し後で、William Hazlitt も亦兩人を訪問している。その詳細は彼の『詩人達との最初の面識』の名文章によって世に知られている。此の文は彼が詩人達との初対面の当時に直ぐに書かれたものではなく、約20年後1817年1月先ず *The Examiner* の記事として書かれ、更に数年後筆を加えられ1823年に

いたって、Leigh Hunt の編集で前年創刊されていた *The Liberal* 第 III 号に載せられたものである。往年の詩人達の動静、人物、創作活動などを活写している名随筆だが、元より事実の客観的記録ではないから時間的記述の点では必ずしも明確とはいえない。両詩人往訪の正確な時日については当然異説が生じてくる。この月日について Mark Reed は諸説を勘案した上で、Hazlitt の記述は30年後の記憶によるにも拘らず全体的に正確だし又 Coleridge の書翰から照合してみても割に容易に推定出来ると言い、Hazlitt がネザ・ストゥイ-オールフォックスデン地区に 来訪したのが5月20日頃、3週日の滞在後に此の地を去ったのは6月10日頃と断じている<sup>103)</sup>。従って、Wordsworth がブリストルから戻って来て Coleridge の家に立ち寄り 其処で始めて Hazlitt と顔をあわせたのは5月22日頃と推定される。この考えによると、Hazlitt の3週間(凡そ5月20日から多分6月10日迄)にわたる滞在与 Cottle の1週間余(凡そ5月22日頃から多分5月30日迄)のそれとが同じ時期に重なることになる。この場合少し妙なことは両人の残した記録に相互に何の記述も言及も出て来ていないということだ。偶然だとしても些かこだわりが残る。

さて Hazlitt の父親は Shropshire の Wem に住む非国教派の聖職者だったが、Hazlitt は父の交際を通して 唯一神教派の Coleridge のことは既に聞き知っていた。Coleridge が Shrewsbury の牧師職に就く決意をし就任前説教を試みることになった時、Hazlitt は1798年1月極寒の払曉10マイルの悪路をもいとわず Shrewsbury まで出かけて、その説教を聴聞した。この時の彼の感銘を彼は自ら記している。『詩人であり哲学者である人が唯一神教派の説教壇上に立って福音を説くとは末法墮落の時代のロマンスでありキリスト教原始精神の謂わば復活であり、抗すべからざることだった<sup>104)</sup>。』親しく此の名説教者の弁説を傾聴するに及んでは、『当時若かった私にとって、音声は人間の心臓の奥底から響いて来た如く、又その祈禱は蔽かな沈黙裡に宇宙を通じて流れて行ったように思えた。…説教の内容は平和と戦争；教会と国家——その提携ではなくて分離；世間の精神とキリスト教精神——その同一ではなくて相互背反——に及んだ。…もし天球の音楽を聞いたとしても是程に喜ばしくはなかったろう。ここでは詩と哲学とが相会していた。真理と天分とが、宗教の眼の下にその是認を得て、相擁しておった。これは私の望外の事でさえあった。私は充分に満悦して帰った<sup>105)</sup>。』

就任説教の後日、聖職社会の慣行によって、Coleridge が Hazlitt の父を訪ねて来た。対坐した時 Hazlitt は『長い間一言も言わないで傾聴を続け、』一方 Coleridge は『その2時間もの間 W.H. の額と話を交わしていた<sup>106)</sup>。』翌日 Coleridge の帰り際に Hazlitt はネザ・ストゥイへの来遊を請じられて『雷電が足下に落ちた<sup>107)</sup>』ように驚き且つ欣喜雀躍した。彼は Coleridge を更に6マイル先迄送って別れた。

後年 Coleridge を立腹させ又 Wordsworth を聳聳させる程の舌鋒鋭い恐る可き批評家と成る Hazlitt は当時は未だ漸く20才の青年で Coleridge に全く心酔してしまっていた。『彼は私が知った最初の詩人であり、確かにその靈感を授けられた呼称にふさわしかった。彼の談話の魅力については大いに聞いておったのだが、期待を外れることはなかった。斯かる魅力には前にも後にも出会ったことはなかった<sup>108)</sup>。』Hazlitt はこの詩人弁舌家往訪の機を鶴首して持っている間、彼の『旅をすることについて』(On Going a Journey) に記されているように、4月10日20才の誕生日に Dee 河の Llangollen 溪谷を訪ね Coleridge の『逝く年の賦』(Ode on the Departing Year) の詩行を誦し乍ら独り旅をたのしんだりしていた。彼の待望は、前記のように、5月下旬か6月始めに実現するに到った。

諸 Hazlitt が訪ねてくると Coleridge は早速その午後彼をオールフォックスデンへ伴って来た。ところが Wordsworth はたまたまその前日にブリストルに赴いて不在だった。それはこの地で4月以来上演され世評高かった 'Monk' Lewis のメロドラマ『城の怪』(The Castle Spectre) を見物する為と<sup>109)</sup>、又 Cottle に会って『リリカル・バラッヅ』の印刷などについて相談するためとであった。Wordsworth が不在だったので Dorothy が応対した。Hazlitt の文によると、『私達は自由に彼女の兄の詩作「リリカル・バラッヅ」を見た。それ等は未だ手書きのままか、又は「シビライン・リーヴズ」(Sybilline Leaves) の形になっていた。私は是等の作品の数篇を大きな満足感と新婦依者の信仰心とを以て耽読した<sup>110)</sup>。』二人の客人はその日は古風な部屋に泊めて貰い、翌朝とねりこの老幹に倚って『リリカル・バラッヅ』の詩稿を読んだ。『Coleridge は朗々とした音楽的な声で「ベティ・フォイ」(Betty Foy=*The Idiot Boy*) というバラッドを朗読した。…「いばら」、「狂った母親」、「あわれなインデアン女の嘆き」の中に此の詩人に特徴的な…深い力と哀感とが感得された。詩歌の新しい文体と新しい精神との感じが私を圧倒した。私には新鮮な土の堀り起こしから生じる影響あるいは春の初迎えの息吹きのようなものを感じられた。…<sup>111)</sup>』この日の夕刻 Coleridge がネザ・ストゥイへ戻る時 Hazlitt はまた同道したが、その途次 Coleridge は Wordsworth の作品や文才についていろいろと語った。

その翌日、すなわち Hazlitt がネザ・ストゥイに姿を見せた2日後、Wordsworth がブリストルからの帰途に Coleridge 家に足をとめた。それで Hazlitt は始めて Wordsworth の聲咳に接する好機を得た。彼等の間では当然 Lewis の劇が話題に上ったわけだが、Wordsworth は『城の怪』は世間の好みには合っているが自分の趣味とは一致しないと言った。Hazlitt にとって初対面の Wordsworth は Coleridge から聞いて想像して<sup>フラスターン</sup>いたよりも『もっとやせこけておりドン・キホーテみたいだった。茶色の麻綾織布の短上衣を着て縞のずぼんを穿き風変りな身なりをしていた。歩きつきにいささか転がるよう

な散漫なところがあり、彼自身の作中のピーター・ベルに似ていないでもなかった<sup>112)</sup>。』

次の日 オールフォックスデンの Wordsworth 家に一団が集まった。Hazlitt は先に Coleridge が Wordsworth の作品を朗読するのを傾聴したのだったが、今度は Wordsworth 自身が戸外でピーター・ベルの物語を朗読するのを聴く幸運にめぐり合った。Hazlitt は兩人が詩を読んだり書いたりする場合の特徴について自分の受けた印象を述べている。『Coleridge と Wordsworth どちらにも朗読の中に詠唱調がある。それが呪文のように聞く者に作用して判断の力を奪う。多分彼等は此のはっきりとしない伴奏を習慣的に用いて思い違いをしていたのかもしれない。Coleridge の詩を読む際のやり方はむしろ声調豊満、活気充溢、変化多様である；Wordsworth の仕様はもっと均等平静、不断持続、全内面的である。前者はむしろ演劇的、後者はむしろ抒情的と言ってよからう。Coleridge は私に「自分自身は平らでない地面を歩きながら、或いは雑木林の伸び放題な枝を押しわけ通り抜けながら、創作をするのが好きだ」と語った；しかるに一方 Wordsworth は何時も、もし出来る場合には、まっ直ぐな砂利歩道をあちこち歩きながら、或いは自分の詩を書き続けてもくつつき廻る邪魔に出くわさないような所で、作品を書いたのだった<sup>113)</sup>。』

『詩人達との最初の面識』は上の記述に続けて、オールフォックスデンからストゥイへ徒歩で帰る途中で交わされた『形而上的論争』に就いて語っている。『同日夕刻帰途についた際、Coleridge は Wordsworth の妹に夜鶯の様々な鳴声のことを説明していたが、その間私は Wordsworth と形而上学的論議に入り込んだ。その論議に於て私達はどちらも自分自身の考えを充分にはっきり又会得し得るようにしおおせなかった。斯様にして私はネザ・ストゥイとその近所で3週間過ごした<sup>114)</sup>。』後年の理論家 Hazlitt は既に早く1796年頃から Thomas Hobbes, George Berkeley, David Hartley, David Hume 等を耽読し近代形而上学に没入していた。そして野心的な『人間行動原理論』(*An Essay on the Principles of Human Action*)の構想に熱中し、遂には勉強過度に陥って、結局所期の目的もむなしくなってきた頃だった。彼がまだ初対面後間もない Wordsworth と忽ち哲学的論争に入り込んだのも彼としては寧ろ自然の成行だったろう。Wordsworth にとっては此の哲学的談論が種となって、前述したように、『忠告と返事』『局面転換』が実ることになったのである。彼は是等2篇の詩の原稿を多分6月10日前後に Bristol に Cottle を訪ねて渡したようだ。

Hazlitt はネザ・ストゥイ界限滞在中、おそらく6月初旬頃、Coleridge とその追隨者 John Chester に伴われて、Cottle の場合のように、Lynton 地方、The Valley of Rocks 方面へ3日程の徒歩旅行をした。Chester はネザ・ストゥイの出身で、Coleridge の口か

ら出る片言隻句をも聞き洩らすまいと何時も師の側にくっついてちょこちょこ急ぎ足で歩いていた。Coleridge はいろいろ文学談義をしたが、『リリカル・バラッツ』については Hazlitt は次のことを伝えている。『「リリカル・バラッツ」は実験なのだと彼は言った；これ迄行なわれてきていたよりもずっと自然な且つ単純な文体で書かれた詩——詩語の技巧的作為は全然棄ててしまって、ヘンリー二世時代以後最も通常の言葉遣いの中一般的に成ってしまっているらしい語だけを使用して書かれた詩——そういう詩に普通世間の趣味がどの程度迄ついてくるかを見ようとして、Coleridge と Wordsworth とで試みようとしている実験なのだと彼は語った<sup>115)</sup>。』

Wordsworth は6月12日頃、Joseph Cottle の兄で詩人の Amos Simon Cottle とともに、James Losh を Shirehampton に訪問し詩談をたのしんで数日を過した。Wordsworth は20日前後にオールフォックスデンに帰ったが、それから数日後に此処の生活の最後が来た。引っ越しは23日の予定だったが、実際にはそれより2日くらい遅れた<sup>116)</sup>。25日か26日の朝 Wordsworth 一家はオールフォックスデンを退去し、家財をたずさえてネザ・ストウイの Coleridge の家に移った。Coleridge は2週間位前から不在だったが、兄妹は此処に7月2日頃まで身を寄せた。ついでブリストルの多分 Cottle 家に7日頃まで滞在した。James Tobin が『わたし達は七人』を『リリカル・バラッツ』中から取り除くように勧告したというのはこの頃のことである<sup>117)</sup>。Wordsworth は Cottle から Losh の病気を知って、彼の療養先 Bath に見舞った。Losh の健康は一進一退して11月下旬に至るまで自宅と療養先とを転々した。Wordsworth 兄妹は結局 Losh の Shirehampton の自宅に8月25日迄起居させて貰った。斯うしたあわただしい生活の間に、兄妹は7月10日から4日程ワイ河の景勝を訪ねて、『ティンタン僧院』が書かれたのだった。

Dorothy が、6月中頃オールフォックスデン住居最後の頃から7月始めブリストルに移る頃まで3週間くらいの間に、Rawson 夫人に宛てて書いた手紙がある。其処にはオールフォックスデン『あのなつかしく美しい所<sup>118)</sup>』を離れる感懐、ドイツでの生活の計画、それまで養育してきた男児 Basil の今後の事等が語られているが、その中で彼女は渡独費用や詩集出版につき報知している：『私達の出発以前に、旅行費用の支払をするのに充分以上の多額の金を、今印刷中の何篇かの詩を兄が売った本屋から受け取ります。兄は或るさしあたりの値段を貰う筈であり、又後日その売上げに応じて支払いを受ける筈です<sup>119)</sup>。』この約2週間後の7月18日付の断翰にも Dorothy は書いている：『…ウィリアムの詩は今印刷所にあります：6週間経ったら出ることでしょう<sup>120)</sup>。』兄妹はドイツ生活の費用を自力で得ようと努めていた。さしあたり財源となし得る自分の詩作に努力を傾け自己調達



を達成しようとしていた。これが『リリカル・バラッド』の具現を促進するのに大きく作用したに相違ない。

8月初旬 Coleridge の提案で Wordsworth 兄妹と3人はウェールズ地方の旅に出た。その途次 John Thelwall を訪ねようとワイ河畔の Liswyn へ行った<sup>121)</sup>。同月中旬頃3名ともにロンドンへ向かい、27日以後はロンドンで2週間余仮寓したようだ。

Wordsworth は6月末以来定住の所も無くなっていた故か、7,8月頃の期間は彼の手紙は書翰集にはたいへん少ない。Coleridge についても7月頃以後9月なかば迄の間の日付で収録されている手紙は殆ど無い。従ってこの期の両人の動静ははっきりさせにくい。

9月14日に Wordsworth 兄妹, Coleridge 及び John Chester の一行は、ハンブルグへ渡航のため Yarmouth へ向け、ロンドンを離れたが、其の前日の13日付 Dorothy の手紙に『リリカル・バラッド』について、特に新しい事はらないが、次のように記されている:『ウィリアムの詩は印刷されていますが、未だ発行されていません。一冊物の小型版で、著者名無しです; 書名は「リリカル・バラッド、その他の詩」です。Cottle は此の一卷に対するウィリアムの取り分として30ギニよこしました<sup>122)</sup>。』

以上『リリカル・バラッド』の立案以後初版出版直前までの経過や両著者の創作活動に関し、主として書翰等に依拠して、其の概略を辿ってみた。 [つづく]

## 註

- 1) "Composed in front of Alfoxden House. My little boy-messenger on this occasion was the son of Basil Montagu." *The Isabella Fenwick Note in The Prose Works of William Wordsworth*, ed. Alexander B. Grosart (Moxon, 1876), iii, 159. [以下 Grosart と記す] Cf. 日本歯科大学紀要 第11号, p. 101; 第12号, p. 29.
- 2) Mar. 3rd: "A very mild, cloudy evening." 6th: "A mild, pleasant afternoon." 8th: "A foggy morning but a clear sunny day." 9th: "A clear sunny morning, ... The day very warm." *Journals of Dorothy Wordsworth*, ed. E. de Selincourt (Macmillan, 1959), i, 11-12.
- 3) "There is a blessing in the air." 5. Cf. 17-20, 29-32.
- 4) "One moment now may give us more  
Than fifty years of reason.\*" 25-6. \*1798-1832. 1837: Than years of toiling reason.
- 5) "And bring no book, for this one day  
We'll give to idleness." 15-6, 39-40.
- 6) "Actually composed while I was sitting by the side of the brook that runs down from the Comb, in which stands the village of Alford, through the grounds of Alfoxden. It was a chosen resort of mine." Grosart, iii, 159.
- 7) "And much it griev'd my heart to think  
What man has made of man." 7-8, 23-4.

- 8) "Man's inhumanity to man/Makes countless thousands mourn." *Man was made to mourn*, vii, 55-6.
- 9) "This poem is a favourite among the Quakers, as I have learnt on many occasions. It was composed in front of the house at Alfoxden in the spring of 1798." *Grosart*, iii, 158.
- 10) "The lines entitled *Expostulation and Reply*, and those which follow, arose out of conversation with a friend who was somewhat unreasonably attached to modern books of moral philosophy."
- 11) Cf. 紀要 第10号, p. 73; 第12号, p. 45.
- 12) Cf. Note 103.
- 13) The 'Matthew' poems (composed 1799, published 1800): *Matthew*, *The Two April Mornings*, *The Fountain*. Cf. *Address to the Scholars of the Village School of*—(composed 1798, published 1842).
- 14) "...this little wreck of fame,  
Cipher and syllable..." *Matthew*, 9-10.
- 15) "And on the stone were graven by his desire  
Lines from the churchyard elegy of Gray." *The Prelude*, x, 535-6 (1850 ed.): 498-500 (1805 text).
- 16) *The Prelude*, x, 484-515 (1805 text): 523-52 (1850 ed.).
- 17) "This and other poems connected with Matthew would not gain by a literal detail of facts. Like the Wanderer in *The Excursion*, this Schoolmaster was made up of several, both of his class and men of other occupations." *Grosart*, iii, 161.
- 18) *The Two April Mornings*, 5-8. *The Fountain*, 20.
- 19) "Matthew...certainly has more affinities with the old Packman than with the scholarly William Taylor, who has been over-hastily identified as Matthew's original." Mary Moorman, *William Wordsworth, A Biography* (Oxford, 1957), i, 52-3.
- 20) *Ibid.*, i, 381 note 2.
- 21) *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed. E. de Selincourt and H. Darbishire (Oxford, 1972), v, 413. "For this portrait of the Pedlar, Wordsworth made several fragmentary sketches, which are jotted down in the Alfoxden note-book (date Jan. 20-March 5. 1798): ...In a calm mood of holy indolence/A most wise passiveness."
- 22) "Nature's sweet voices always full of love  
And joyance." 42-3.
- 23) Letter no. 170. To John Wilson, 7 June 1802. *The Letters of William and Dorothy Wordsworth: The Early Years*, ed. E. de Selincourt, rev. C.L. Shaver (Oxford, 1967), 355-6. [以下 L.E. と略す]  
Christopher Wordsworth, *Memoirs of William Wordsworth* (Moxon, 1851), i, 196.  
*Grosart*, ii, 211.

Cf. 紀要 第10号, p. 73.

- 24) "Composed at the same time as *Expostulation and Reply*." *Grosart*, iii, 158.
- 25) "You ask to be informed of our system respecting Basil; it is a very simple one, so simple that in this age of systems you will hardly be likely to follow it. We teach him nothing at present but what he learns from the evidence of his senses, ...He knows his letters, but we have not attempted any further step in the path of book learning..." No. 65. D.W. to Mrs. John Marshall, 19 Mar. 1797. *L.E.*, 180.
- 26) "One impulse from a vernal wood  
May teach you more...  
Than all the sages can." 21-4.
- 27) See Note 4.
- 28) Cf. 紀要 第5号, p. 52.
- 29) "Our meddling intellect  
Misshapes the beauteous forms of things;  
—We murder to dissect." 26-8.
- 30) *The Prelude*, xi, 121-37 (1805 text); x, 889-901 (1805): xi, 293-305 (1850 ed.); xiii, 166-70 (1805): xiv, 188-92 (1850).  
Cf. 紀要 第5号, p. 49.
- 31) "barren intermeddling subtleties" *Prel.*, xi, 204 (1805): xii, 155 (1850).
- 32) "a heart/That watches and receives" 31-2.
- 33) "We left Alfoxden on Monday morning, the 26th\* of June, stayed with Coleridge till the Monday following, then set forth on foot towards Bristol. We were at Cottle's for a week, and thence we went toward the banks of the Wye. We crossed the Severn Ferry, and walked ten miles further to Tintern Abbey, a very beautiful ruin on the Wye. The next morning we walked along the river through Monmouth to Goderich Castle, there slept, and returned the next day to Tintern, thence to Chepstow, and from Chepstow back again in a boat to Tintern, where we slept, and thence back in a small vessel to Bristol.  
The Wye is a stately and majestic river from its width and depth, but never slow and sluggish; you can always hear its murmur."  
Christopher Wordsworth, *Memoirs* (Moxon, 1851), i, 116-7.  
\* "Monday was, however, the 25th." Moorman, *op. cit.*, i, 400 note.  
"If the departure was on Monday, as is likely, the date would have been the 25th." Mark L. Reed, *Wordsworth; The Chronology of the Early Years, 1770-1799* (Harvard, 1967), 241 note.
- 34) Cf. 紀要 第11号, p. 102.
- 35) *Tintern Abbey*, 56-8.
- 36) "Five years have passed; five summers, with the length  
Of five long winters!" *Ibid.*, 1-2.
- 37) "No poem of mine was composed under circumstances more pleasant for me to remember than this. I began it upon leaving Tintern, after crossing the Wye,

and concluded it just as I was entering Bristol in the evening, after a ramble of four or five days with my sister. Not a line of it was altered, and not any part of it written down till I reached Bristol. It was published almost immediately after in the little volume..." *Grosart*, iii, 45.

- 38) "He told us he had written *Tintern Abbey* in 1798, taking four days to compose it, the last 20 lines or so being composed as he walked down the hill from Clifton to Bristol." The Duke of Argyle's letter to the Rev. T.S. Howson, Sep. 1848, qtd. in *Poetical Works*, ii. 517.
- 39) なお、初版以後1802年、1820年、1827年、1845年に若干の語句が改められた。
- 40) "Therefore am I still  
A lover.../...of all the mighty world  
Of eye and ear, both what they half-create,\*  
And what perceive;..." 103-8.  
\* "This line has a close resemblance to an admirable line of Young, the exact expression of which I cannot recollect."
- 41) "And (the senses) half create the wondrous world they see." Edward Young, *The Complaint, or Night Thoughts on Life, Death and Immortality*, vi. 424.
- 42) "Half-heard and half-created" *Poetical Works*, v, 340, Appendix B, Fragment 1.
- 43) "Note to the Poem on Revisiting the Wye.—I have not ventured to call this poem an Ode; but it was written with a hope that in the transitions, and the impassioned music of the versification, would be found the principal requisites of that species of composition."
- 44) Cf. No. 77. Dorothy to Mary Hutchinson, 20 Nov. 1797. *L.E.*, 194.
- 45) Cf. No. 78. Dorothy to Christopher W., 8 Dec., 1797. *L.E.*, 195.
- 46) Cf. No. 79. W.W. to Cottle, 13 Dec. 1797. *L.E.*, 196. No. 80. Dorothy to ?, 21 Dec. 1797. *L.E.*, 197.
- 47) Cf. 紀要 第4号, p. 293.
- 48) "...the plan of a ballad, to be published with some pieces of William's." No. 77. See Note 44. Cf. 紀要 第9号, p. 35.
- 49) No. 218. To J.P. Estlin, 6 Jan. 1798. *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, ed. Earl Leslie Griggs (Oxford, 1966), i, 368. [以下 *L.C.* と略す]
- 50) "After much and very painful hesitation..." *Ibid.*, i, 367.
- 51) Cf. *Ibid.*, i, 368. 紀要 第10号, p. 62.
- 52) No. 233. To J. Cottle, 18 Feb. 1798. *L.C.*, i, 387.
- 53) "I have received nothing yet from the Wedgwoods and my money is utterly expended." *Ibid.*
- 54) Cf. No. 235. To Cottle, 7 Mar. 1798. *L.C.*, i, 391.
- 55) *The Prelude*, iv, 363-504 (1805 text): 364-469 (1850 ed.).
- 56) Cf. No. 83. D.W. to Hutchinson, 5 Mar. 1798, *L.E.*, 199.
- 57) Cf. No. 70. D.W. to Hutchinson, June 1797. *L.E.*, 189.
- 58) "I have written 1300 lines of a poem in which I contrive to convey most of the

knowledge of which I am possessed. My object is to give pictures of Nature, Man, and Society. Indeed I know not anything which will not come within the scope of my plan." No. 84. To J. Tobin, 6 Mar. 1798. *L.E.*, 212.

"I have been tolerably industrious within the last few weeks. I have written 1300 lines of a poem which I hope to make of considerable utility; its title will be *The Recluse or views of Nature. Man, and Society.*" No. 85. To J. Losh, 11 Mar. 1798. *L.E.*, 214. Cf. 紀要 第11号, p. 87.

- 59) "—The Giant Wordsworth—he has written near 1200 lines of a blank verse, superior, I hesitate not to aver, to any thing in our language which any way resembles it." No. 235. See Note 54.
- 60) No. 83. *L.E.*, 200. See Note 56.
- 61) "...that vile jacobin villain..." No. 185. S.T.C. to Josiah Wade, circa 8 Apr. 1797. *L.C.*, 321.
- 62) "Faith, we are a most philosophical party—the enthusiastic group consisting of Coleridge and his Sara, Wordsworth and his sister, and myself—" John Thelwall to his Wife, 18 July 1797, qtd. in James Dykes Campbell, *Samuel Taylor Coleridge* (Macmillan, 1894), 72–3.
- 63) "a very warm hearted honest man" No. 200. S.T.C. to J. Wade, 1 Aug. 1797. *L.C.* 339.
- 64) Cf. A.J. Eaglestone, *Wordsworth, Coleridge, and the Spy in Coleridge, Studies by Several Hands*, ed. E. Blunden and E.L. Griggs (Constable, 1934), 71–87.
- 65) "We leave Allfoxden at Midsummer...What may be our destination I cannot say. If we can raise the money, we shall make a tour on foot; probably through Wales, and northwards. I am at present utterly unable to say where we shall be. We have no particular reason to be attached to the neighbourhood of Stowey, but the society of Coleridge, and the friendship of Poole." No. 84. To J.W. Tobin, 6 Mar. 1798. *L.E.*, 211.
- 66) "It is decided that we quit Allfoxden...It is most probable that we shall go back again to Racedown, as there is little chance of our getting a place in this neighbourhood. We have no other very strong inducement to stay but Coleridge's society, but that is so important an object that we have it much at heart." No. 83. D.W. to Hutchinson, 5 Mar. 1798. *L.E.*, 199–200. Cf. No. 93. D.W. to Mrs. William Rawson, 13 June–3 July 1798. *L.E.*, 220.
- 67) "Our principal inducement was Coleridge's society." No. 72. D.W. to Hutchinson, 14 Aug. 1797. *L.E.*, 190.
- 68) "We are three miles from Stowey..." *Ibid.*  
 "...4 miles from Stowey..." No. 197. S.T.C. to Robert Southey, c. 17 July 1797. *L.C.*, i, 334.  
 "for change of air" *Ibid.*, i, 336.
- 69) Cf. No. 186. S.T.C. to Cottle, Early April 1797? *L.C.*, i, 322.
- 70) "in a most beautiful and romantic situation by the sea side" No. 197. S.T.C. to

- R. Southey. *L.C.*, i, 334.
- 71) "a large mansion" No. 72. See Note 67.
- 72) Cf. No. 242. S.T.C. to Cottle, 12? Apr. 1798. *L.C.*, i, 403.
- 73) "We are obliged to quit this place at Midsummer. ... We have a delightful scheme in agitation, ... We have come to a resolution, Coleridge, Mrs. Coleridge, my Sister and myself of going into Germany, where we purpose to pass the two ensuing years in order to acquire the German language, and to furnish ourselves with a tolerable stock of information in natural science. Our plan is to settle if possible in a village near a university, in a pleasant, and, if we can a mountainous, country; it will be desirable that this place should be as near as may be to Hamburg on account of the expense of travelling." No. 85. To J. Losh, 11 Mar. 1798. *L.E.*, 213.
- 74) "Samuel Taylor Coleridge-Logician, Metaphysician, Bard!" Charles Lamb, *Christ's Hospital Five and Thirty Years Ago*.
- 75) "I still think the realization of the scheme of high importance to my intellectual utility; and of course to my moral happiness." No. 252. S.T.C. to Thomas Poole, 3 Aug. 1798. *L.C.*, i, 414.
- 76) Cf. *Ibid.*
- 77) No. 239. S.T.C. to Cottle, c. 13 Mar. 1798. *L.C.*, i, 399-400.
- 78) Cf. 紀要 第9号, pp. 35 & 43n.4.
- 79) Cf. 紀要 第4号, p. 297.
- 80) "...our thoughts were bent on a plan for the accomplishment of which a certain sum of money was necessary." No. 242. *L.C.*, i, 402. See Note 72.
- 81) "Publication was ever to be most irksome; so that if I had been rich, I question whether I should ever have published at all." W.W. to Aubrey de Vere, 1842. *The Letters of William and Dorothy Wordsworth: The Later Years*, ed. E. de Selincourt (Oxford, 1939), iii, 1387.
- 82) "There is little need to advise me against publishing; it is a thing which I dread as much as death itself." No. 84. To J.W. Tobin, 6 Mar. 1798. *L.E.*, 211.
- 83) Cf. Joseph Cottle, *Early Recollections; chiefly relating to the late Samuel Taylor Coleridge, during his long residence in Bristol* (London, 1837), i, 299, 309; J. Cottle, *Reminiscences* (London, 1847), 126, 132; qtd. in W.J.B. Owen, *Lyrical Ballads 1798* (Oxford, 1969), x-xii and Moorman, *op. cit.*, i, 372.
- 84) "My Tragedy employed and strained all my thoughts and faculties for six or seven months: Wordsworth consumed far more time, and far more thought, and far more genius." No. 242. S.T.C. to Cottle, c. 12 Apr. 1798. *L.C.*, i, 402.
- 85) "You will be pleased to hear that I have gone on very rapidly adding to my stock of poetry. Do come and let me read it to you, ..." No. 87. To J. Cottle, 12 Apr. 1798. *L.E.*, 215.
- 86) *Journals of D.W.*, i, 16, Apr. 20; "Peter Bell begun..." Cf. "Poetical Works ii (1944), 527, misdates the beginning of PB 12 Apr." Reed, *op. cit.*, i, 233.

- 87) Cf. No. 242. To Cottle, c. 12 Apr. 1798. *L.C.*, i, 403.
- 88) "He is about to publish some poems. He is to have twenty guineas for one volume, and he expects more than twice as much for another which is nearly ready for publishing." No. 88. D.W. to Richard Wordsworth, 30 Apr. 1798. *L.E.*, 216.
- 89) "I have lately been busy about another plan which I do not wish to mention till I see you." No. 90. To J. Cottle, 9 May 1798. *L.E.*, 218.
- 90) "...W. would not object to the publishing of *Peter Bell* or the *Salisbury Plain*, singly; but to the publishing of *his poems* in two volumes he is decisively repugnant and oppugnant..." No. 250. To Cottle, Monday Morning (28 May 1798).\* *L.C.*, i, 411-2. \*"...written on 28 May, immediately following Cottle's visit, or at latest on Monday, 4 June." *L.C.*, i, 411n. Cf. "The latter date is probably the correct one." *L.E.*, 220n.
- 91) Cf. No. 250. *L.C.*, i, 412.
- 92) "For the sake of variety and from a consciousness of my own weakness I was induced to request the assistance of a Friend, who furnished me with the Poems of the *Ancient Mariner*, the *Foster-Mother's Tale*, the *Nightingale*, the *Dungeon*, and the Poem entitled *Love*. I should not, however, have requested this assistance, had I not believed that the poems of my Friend would in a great measure have the same tendency as my own, and that, though there would be found a difference, there would be found no discordance in the colours of our style; as our opinions on the subject of poetry do almost entirely coincide." Wordsworth's *Preface* of 1800.
- 93) "However, I waive all *reasoning*; & simply state it as an unaltered opinion, that you should proceed as before, with the ancient Mariner." No. 250. *L.C.*, i, 412. See Note 90.
- 94) *Journals*, i, 14. Cf. 紀要 第9号, p. 41.
- 95) "The dedication to the Wedgewoods would be indelicate & *unmeaning*.—If after 4 or 5 years I shall have finished some work of some importance, which could not have been written but in an unanxious seclusion—to them I will dedicate it, for the Public will have owed the work to them who gave me the power of that unanxious Seclusion." No. 250. *L.C.*, i, 412. See Note 90.
- 96) "As to anonymous Publications, depend on it, you are deceived.—Wordsworth's name is nothing—to a large number of persons mine *stinks*—The Essay on Man, the Botanic Garden, the Pleasures of Memory,\* & many other most popular works were published anonymously." *Ibid.* \*Alexander Pope, *An Essay on Man in Four Epistles to Henry St. John Lord Bolingbroke*, 1732-4. Erasmus Darwin, *The Botanic Garden*, -ii, *The Lovers of the Plants*, 1789; i, *The Economy of Vegetation*, 1791. Samuel Rogers, *The Pleasures of Memory*, 1792.
- 97) "...18 lines in a page, the lines closely printed, certainly, *more closely* than those of the *Joan*—(Oh by all means closer! W. Wordsworth) *equal ink*; & *large margins*. That is *beauty*—" *Ibid.*

- 98) Cf. No. 242. S.T.C. to Cottle, c. 12 Apr. 1798. *L.C.*, i, 403. No. 90. W.W. to Cottle, 9 May 1798. *L.E.*, 218.
- 99) J. Cottle, *Reminiscences*, i, 320.
- 100) Cf. 紀要 第9号, p. 36.
- 101) Cf. J. Cottle, *Recollections*, i, 314-5.
- 102) "We leave Allfoxden in three weeks, we are going to take lodgings for a short time in the neighbourhood of Bristol. William has now some poems in the Bristol press, and he wishes to superintend the printing of them, besides we have some particular friends at, and in the neighbourhood of, that place.  
William has sold his poems very advantageously—he is to receive the money when the printing is completed." No. 91. D.W. and W.W. to Richard Wordsworth, 31 May 1798. *L.E.*, 219.
- 103) Reed, *op. cit.*, 318 Appendix viii, 237-9. Cf. *My First Acquaintance with Poets in English Critical Essays: Nineteenth Century*, ed. E.D. Jones (Oxford, 1916), 164-90. S.T.C. to T. Poole, 16 June 1798. *L.C.*, i, 413-4, No. 251. なお, Hazlitt が待望の Coleridge 訪問をした月日については, Moorman, *op. cit.*, i, 396-7 は6月4日以後, Percival P. Howe, *The Life of William Hazlitt* (Penguin Books, 1949), 63n. は5月末日頃と推定している.
- 104) "A poet and a philosopher getting up into a Unitarian pulpit to preach the Gospel, was a romance in these degenerate days, a sort of revival of the primitive spirit of Christianity, which was not to be resisted." Hazlitt, *My First Acquaintance*, 166.
- 105) "...it seemed to me, who was then young, as if the sounds had echoed from the bottom of the human heart, and as if that prayer might have floated in solemn silence through the universe. ...The sermon was upon peace and war; upon church and state—not their alliance, but their separation—on the spirit of the world and the spirit of Christianity, not as the same, but as opposed to one another. ...I could not have been more delighted if I had heard the music of the spheres. Poetry and Philosophy had met together. Truth and Genius had embraced, under the eye and with the sanction of Religion. This was even beyond my hopes. I returned home well satisfied." *Ibid.*, 166-7.
- 106) "I listened for a long time without uttering a word. ...For those two hours, he afterwards was pleased to say, he was conversing with W.H.'s forehead!" *Ibid.*, 168.
- 107) "I was not less surprised than the shepherd-boy ... when he sees a thunderbolt fall close at his feet." *Ibid.*, 174.
- 108) "He was the first poet I had known, and he certainly answered to that inspired name. I had heard a great deal of his powers of conversation, and was not disappointed. In fact, I never met with any thing at all like them, either before or since." *Ibid.*, 177.
- 109) Cf. 紀要 第10号, pp. 65-6.



- 110) "...we had free access to her brother's poems, the *Lyrical Ballads*, which were still in manuscript, or in the form of *Sybilline Leaves*. I dipped into a few of these with great satisfaction, and with the faith of a novice." Hazlitt, *op. cit.*, 180.
- 111) "Coleridge read aloud, with a sonorous and musical voice, the ballad of *Betty Foy*. ... in the *Thorn*, the *Mad Mother*, and the *Complaint of a Poor Indian Woman*, I felt that deeper power and pathos which have been since acknowledged ... as the characteristics of this author; and the sense of a new style and a new spirit in poetry came over me. It had to me something of the effect that arises from the turning up of the fresh soil, or of the first welcome breath of Spring, ..." *Ibid.*, 181.
- 112) "...[he] was more gaunt and Don Quixote-like. He was quaintly dressed ... in a brown fustian jacket and striped pantaloons. There was something of a roll, a lounge in his gait, not unlike his own Peter Bell." *Ibid.*, 182
- 113) "There is a *chaunt* in the recitation both of Coleridge and Wordsworth, which acts as a spell upon the hearer, and disarms the judgment. Perhaps they have deceived themselves by making habitual use of this ambiguous accompaniment. Coleridge's manner is more full, animated and varied; Wordsworth's more equable, sustained, and internal. The one might be termed more *dramatic*, the other more *lyrical*. Coleridge has told me that he himself liked to compose in walking over uneven ground, or breaking through the straggling branches of a copse-wood; whereas Wordsworth always wrote (if he could) walking up and down a straight gravel-walk, or in some spot where the continuity of his verse met with no collateral interruption." *Ibid.*, 184.
- 114) "Returning that same evening, I got into a metaphysical argument with Wordsworth, while Coleridge was explaining the different notes of the nightingale to his sister, in which we neither of us succeeded in making ourselves perfectly clear and intelligible. Thus I passed three weeks at Nether Stowey and in the neighbourhood, ..." *Ibid.* Cf. 紀要 第10号, p. 73; 第12号, p. 27.
- 115) *Ibid.*, 185-7. Cf. 紀要 第9号, p. 36.  
"He said the *Lyrical Ballads* were an experiment about to be tried by him and Wordsworth, to see how far the public taste would endure poetry written in a more natural and simple style than had hitherto been attempted; totally discarding the artifices of poetical diction, and making use only of such words as had probably been common in the most ordinary language since the days of Henry II." *Ibid.*, 187.
- 116) "We shall leave Alfoxden on Saturday the 23rd of this month." No. 94. D.W. to Richard Wordsworth, 13 June 1798. *L.E.*, 225. Cf. Note 33.
- 117) Cf. 紀要 第11号, p. 102.
- 118) "that Dear and beautiful place" No. 93. D.W. to Mrs. William Rawson, 13 June and 3 July 1798. *L.E.*, 222.

- 
- 119) "...we shall receive, before our departure much more than sufficient to defray the expenses of our journey, from a bookseller to whom William has sold some poems that are now printing, for which he is to have a certain present price and is to be paid afterwards in proportion to their sale." *Ibid.* 224.
- 120) "...William's poems are now in the press; they will be out in six weeks." No. 95. D.W. to ?, 18 July 1798. *L.E.*, 226.
- 121) Cf. 紀要 第11号, pp. 113-4.
- 122) "[William's poems are] printed, but not published. [They are] in one small volume, without the name of the author; their title is "*Lyrical Ballads, with other Poems.*" Cottle has given thirty guineas for William's share of the volume." No. 97. D.W. to ?, 13 Sep. 1798. *L.E.*, 227.